

協議会ニュース 122号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 2009. 1



剣岳：山田絹子（知多支部）

研修レポート 蛇峠山 支部だより

伊良湖岬自然体験エコツアー
人と自然の共生国際フォーラム
「知多地域みどりの少年団交歓会」
くらかり深谷の観察

会員のページ

自然観察指導員と生物多様性条約
ニューカレドニアの自然を感じて
東三河の野生哺乳類
理事会記録
編集部

小山舜二……………P2

高橋康夫……………P3

山田博一……………P4

榊原正躬……………P6

石黒豊広……………P7

菅我部行子……………P8

吉川洋行……………P9

神戸敦……………P10

……………P11

……………P12

蛇 峠 山 研修会

奥三河支部 小山舜二

日時 平成 20 年 10 月 26 日(日) 10:00～15:00

天候 小雨模様

場所 長野県下伊那郡平谷村

紅葉真っ盛りの治部坂高原スキー場駐車場(標高約 1,000m)に集まった支部会員 13 名は小雨模様と高所特有な冷え込みに身を縮めた。

集合時間の 10 時、本日の開催趣旨「会員相互の親睦と指導員の資質の向上を主目的に研修会を行う。それぞれが異なった得意分野で活動する会員も、本日の研修会からより多くの知識を習得する機会になるよう」と会長挨拶。続いて、神戸・熊谷指導員から行程、観察ポイント等の説明がなされた。天候を考えて、研修時間の短縮を図るため標高 1457m の馬の背まで車で移動、スキー場脇に点在する半ば放置された別荘に景気の低迷する時代の流れを感じた。防寒合羽、手袋を着用、寒い寒いを連発。散策コースは滑りやすいため、管理道を観察コースにした研修会が始まった。標高 1,400m 付近で、紅葉は既に終わりを告げ、ウラジロモミの濃緑がひととき目立った。「モミは標高によって違い、高所になると葉が小さくなり、もう少し高くなるとシラビソモミの植生に変わる」などの説明を受けた。またズミの群落も所々で観察された。道端で、可憐に咲くホソバツルリンドウを見つけた熊谷指導員は、旧来の友に出会ったかのような感嘆の声で、「この花を見られたということは幸だ、まず見られない。今日の研修会の最大の収穫だ、今日の研修会は、これで終わっても悔いはない。」この説明に一同感激！ 先に進まない。山田、柴田指導員はウメバチソウ、マツムシソウを見つけ、減少したものの見られた事に女性らしく嬉しさを表した。田実指導員はダケカンバの皮を拾い、表皮はたき火の火種に使うと非常に重宝する、捲らなくても落ちているものを拾えば充分だと解説・・・そんなこんなの中に蛇峠山の頂上 1,664m に到達した。頂上からは南アルプス、中央アルプスなど 360° の展望ができ、レーダー雨量計など多くの電波棟が林立している。その一角にある武田信玄軍の「のろし台」跡を見て、「なるほど、蛇峠山は今も昔も大事な情報基地なんだな」と妙なところで納得。

研修時間の短縮を図ったものの全会員が熱中し、短縮どころか延長してしまったが、豊富な自然と人工構造物のアンバランスの一方で、その必要性を目の当たりにした有意義な研修会であった。



伊良湖岬自然体験エコツアー

東三河支部 高橋 康夫

平成 19 年、議員立法によるエコツーリズム推進法が制定されました。自然環境保全、観光振興、地域振興、環境教育の四つの柱とするこの法をもとにガイドの案内により、自然観光資源の保護に配慮しながら、ふれあい、学び、知るエコツアーが各地でもよおされています。田原市においても観光協会の主導で渥美半島の恵まれた自然を舞台にした、上質な自然・歴史体験をこの地方に来遊した観光客を対象に、より意義のある体験をしていただきたいと、エコツアー企画することになりました。初回は、東三河自然観察会に「渥美半島で、体験できる観察会のようなものができないか」との打診があり、双方が協議して、今回は伊良湖岬付近で実施することになりました。伊良湖岬は、渥美半島の先端にあり、海浜植物、磯の生き物、樹林、昆虫、野鳥など豊かな自然環境があるからです。

エコツアーは何といってもガイドが大きな役割を担っています。参加者に、地域の自然や文化をより深く理解してもらう為には、豊かな知識と経験を活かした案内が要求されます。

★ 手順として

1. 観察会の会員 2 名が担当となり、観光協会とで、日程などの調整
2. 3 回ほど会合を持ち、内容、方法などの検討
3. 並行して会員に趣旨を説明し、ガイド役となる協力者を募集
4. 実施回数は 5 回 テーマの設定
 - 1 回 7.27 (日) 浜辺のたんけん
 - 2 回 8. 3 (日) 磯の生きもの
 - 3 回 8.11 (月) 浜でがんばる植物
 - 4 回 9.28 (日) 海を渡るチョウ
 - 5 回 10.4 (土) 旅をする鳥たち

5. 案内時間 各回 9:30~11:30

6. ガイド内容は①伊良湖の特長 ②海岸の植物 ③海岸の動物 ④鳥やチョウの渡り ⑤海岸の漂着物 など

7. 資料 A3 版両面印刷 表面は伊良湖の自然 裏面は伊良湖岬の航空写真

8. スタッフ ガイド各回 4~5 名 観光協会職員 2~3 名

★ ツアーを終えて

試行的な開催のエコツアー、第 1 回は参加者 0 名のスタートでありましたが、新聞などのメディアにも掲載され、その後周辺地域や遠隔地の参加者も増え、総数 84 名でした。

第 2、3 回は猛暑で、滴り落ちる汗のなか、磯の生き物、浜の植物に焦点を当てたツアーを行いました。第 4、5 回はチョウと鳥に焦点を合わせたのですが、天候の関係か、4 回は鳥が、5 回にはチョウが多く見られるという皮肉な結果になりました。参加者の感想は「アサギマダラのマーキングで良い経験ができた」「トビと渡りをするサシバなどの見分けがわかった」「海浜植物の豊富さに驚いた」などおおむね好評でした



写真 アサギマダラの解説

今後、東三河観察会としては開催日、プログラム、スタッフなどでどのように関わっていくかという課題が残りました。

第2回 人と自然の共生国際フォーラム

(The 2nd International Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings) の報告

尾張支部 山田博一

日時：平成20年11月15日（土）午前10時から午後7時30分（参加費：無料）

場所：愛知県立大学 講堂（愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3）

テーマ：「自然の叡智を再考する」 ～森林から考える人と自然の共生～

"Nature's Wisdom" Revisioning from the Forest, the harmonious Co-existence of Nature and Human Beings

協議会から松尾さん、浅井さん、尾張支部（尾張自然観察会）から大谷さん、樋口さん、山口昌宏さん、山田が参加しました。

開会式 Opening Ceremonyのあと基調講演（Presentation）でケビン・ショート（Kevin Short）氏による「身近な森の魅力と魔力」 ～Magic and Mystery of Local Woods～が行われました。ケビン氏は、スタンフォード大学で文化人類学生態学専攻して、日本の田舎の「里山自然」に惹かれ、1987年より千葉県印西市に在住して、日本の文化をしっかりと勉強しただけあってなかなかのものでした。協議会が講演を頼んだが断られたケビン・ショート氏の講演を、今日聴けるとは奇遇でした。もし、協議会の講演を引き受けられていたらもっと名が売れたと思うのですが残念でなりません。

ポスターセッション（Poster Session）が12時30分から13時15分に食堂内の設置ブースで、自然環境に関する活動に取組む県内外の28の活動団体・施設により活動が発表されました。尾張自然観察会から樋口会長と山田が行いました。

パネルディスカッション（Panel Discussion）が「森林から考える人と自然の共生」

～Revisioning from the Forest, the harmonious Co-existence of Nature and Human Beings～というテーマで、13時30分から16時45分に行われました。コーディネーターは、川井秀一氏（京都大学生存圏研究所所長）で「木づかい、森づくりの環境ネットワークづくり」に取り組んでおられ、「国産材を利用し、みんなで日本の森を育て、環境を守ろう」という提言をされています。

パネリストは、以下の4名です。

天野正博氏（早稲田大学人間環境科学科教授）：地球規模での森林の温暖化軽減機能に関する研究で、森林がもつ大気中の炭素固定機能を京都議定書の観点から評価する手法

を開発しています。「二酸化炭素を吸収するのに一番安いコストですむのは森である」とわかりやすく話されました。

川勝平太氏（静岡文化芸術大学学長）は、近代西洋文明に対して日本文明が持つ「もったいない」という感覚、「里山」というシステム、ハートを育む「景観」を大切にすべきだと哲学的観点から提唱されました。これが、「森から学ぶ」さらには、「自然の英知から学ぶ」ことにつながることをわかりやすく話されました。

蔵治光一郎氏（東京大学愛知演習林講師）は、森林と水の関係を自然科学、人文・社会科学の両面から研究しながら「森の健康診断」を愛知県・矢作川水系の森林ボランティアらとともに創設し、活動しています。大学の先生でありながら、ボランティアと対等に、共に学ぶ姿勢を貫かれているのが印象に残りました。

小澤紀美子氏（東京学芸大学名誉教授兼東海大学人間環境学科特任教授）は、アメリカやイギリスの環境教育を日本に普及して、子どもたちへの教育と同時に「教師への教育」に大変力を入れておられ、学校現場における環境学習の取り組みについていろいろな実践をされています。開発ではなく、持続可能な発展の必要性を強く主張されました。

フォーラムのねらい

「自然の叡智」をテーマに開催された愛知万博の理念や成果を継承し、人と自然が共生する持続可能な社会づくりに向けた大きな潮流を創り出すため、2007年から10年間に渡って、「人と自然の共生国際フォーラム」が開催されます。

地球環境の未来は、「森林」が大きな鍵を握っています。第2回目となる今回のフォーラムでは、世界の森林の現状に目を向けるとともに、「森林」が地球環境や私たちの暮らしにどのように関わっているか考えます。

最後に次のフォーラム宣言が全員の拍手で承認されました。

- ①地球温暖化の防止、生物多様性の確保、水資源のかん養、災害の防止など多様な森林の働きを、改めて科学的に正しく理解するよう努めること。
- ②森林の働きについて、子どもたちを始め広く多くの人へ理解の輪を広げていくよう、森林を舞台とした活動や学習を推進すること。
- ③森林を持続的に守り、利用していくため、自発的で自立した地域づくりと一体となって森林整備を進めると共に、NPO・企業・学校など多様な主体の積極的な参加を促すこと。また、国産木材の選択的利用を推進し、木質資源の持続可能で循環的な利用を確保すること。
- ④今後これらのことをまわりの人たちを始め世界に広く発信し、自らも具体的な行動を起こしていくことを約束する。

カラー写真などは、<http://www.geocities.jp/symbio721/forum08.html> を見てください。

「知多地域みどりの少年団交歓会」への取り組み

知多支部 榊原正躬

本年度は10月18日に知多半島内の8市町から11分団（隊員は合計で小学生約160名）が参加しました。この交歓会の開催地はみどりの少年団のある市町の持ち回りで、今年は半田市でした。ちなみに、去年は常滑市、来年は武豊町です。主催は愛知県知多農林水産事務所と開催市町で、私たち知多自然観察会は1986年から協力させていただき、今年で22年になります。

本稿では、行事当日の様子と当日に到るまでの取り組みを紹介します。

当日は、開会式の後、班ごとの自然観察会→昼食→クラフト活動→閉会式で一日の活動は終了です。

午前の自然観察会は、自然観察とネイチャーゲームとクラフトに利用できそうな材料拾いです。ネイチャーゲームの内容は、以前は「カモフラージュ」が中心でしたが、近年は「森の宝物」に定着しています。「宝物リスト」のカードは毎年、ネイチャーゲーム協会から購入しています。

なお、ここでのクラフト用の材料拾いは軽く扱い、参加者に強要しません。材料は、指導員が事前に海岸、里山、公園、神社等から大量に集め、それらを使うことを前提にしているからです。

午後からのクラフトは、近年、ダンボールを利用した“写真立て”に定着しています。参加した隊員たちがどのような写真立てを作るのかイメージできるように、開会式の時にサンプルを紹介しています。諸注意や制作ポイントの説明後、実質の制作時間は90分足らずですが、子どもたちは真剣に材料を選び、慎重に作ります。私たちも見ていて嬉しい限りです。班ごとに、完成した写真立てを満足気にそれぞれ持って、記念撮影をして終わります。

次に、当日までのプログラムを紹介します。

事前に3回の打ち合わせをします。参加者は県知多農林水産事務所の担当者、開催市町の担当者、本番に参加できる知多自然観察会の指導員です。指導員はこの3回の内1回以上は出るようにします。ちなみに、「知多地域みどりの少年団交歓会」の企画運営は開催市町在住の指導員があたり、市町役所の担当者との窓口になります。

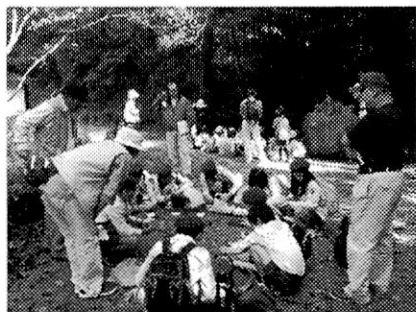
打ち合わせの1回目は8月下旬、2回目は9月中旬、3回目は10月初旬（本番二週間前）です。内容は当日の活動や時間配分の具体化、会場や観察コースの下見、及び林務課・市町・知多自然観察会の役割分担の確認です。近年、実施スタイルが定着化しているので、お互い何となくは分かっているものの、やはりこの話し合いは本当に大切な位置づけです。

このようにして当日を迎えます。ちなみに、知多自然観察会からの出席者は、例年、25～30名程です。

近年行われた行事の様子は、Webでご覧ください。

Web⇒<http://chitakan.com/otetsudai/index.html>

（知多自然観察会内、「受託・お手伝い」）



くらがり溪谷の観察

西三河支部 石黒豊広

くらがり溪谷は岡崎市石原町（旧額田町）西三河の東の端に位置し、標高789mの本宮山の北麓にあり、東および南麓は東三河の豊橋平野に面しています。

豊川沿いに走る中央構造線の内帯に位置し、マグマの貫入による熱変成を強く受けていて、主に領家変成岩からなる山になっています。溪谷沿いは強い熱による片理や黒雲母の生成により、はがれやすい岩や片麻岩が多くみられ、くらがり八景の鬼の押し出しなどの景観を作っています。溪谷の水は男川の源流をなして清く、その流れは矢作川に注いでいます。漢字表記は「闇刈溪谷」と書き、その名前のとおり溪谷沿いは木々が鬱蒼と繁り昼なお暗い溪谷という感じです。夏は涼しく川遊び、鱒釣りや掴み取りでにぎわいます。

その溪谷沿いの観察会を西三河自然観察会の地域定例観察会として3月～12月まで第2日曜日の9:00から15:00まで会員3名で担当し開催しています。

本宮山は本宮山県立自然公園として1969年に指定されている地域でくらがり溪谷もその一部となっています。現在その多くはスギ、ヒノキの植林となっていますが、溪谷沿いは自然が良く残っているため、観察会では溪谷沿いを中心にタブ、イヌガシなどの暖地の植物、キハダ、アワブキ、ミヤマハハソ、オニイタヤなど温帯の冷涼な気候を好む植物などが混在する多種多様な植物を中心に観察会を行っています。今回は11月9日に西三河支部および地域定例観察会合同で開催された「晩秋の花達と実りの秋」の様子を紹介します。

観察会は主に昼まで溪谷沿いを登り、昼食後集合場所まで戻るコースで行っています。

林道沿いに咲く花はヤクシソウ、ノコンギク、サジガnekビソウ、キッコウハグマ、やはり秋はキク科。溪谷の岸边ではユキノシタ科のダイモンジソウが盛りです。

木々は紅葉黄葉の季節、赤色はシラキ、ウルシ科の仲間が溪谷沿いに目立ちサクラの仲間ヤマザクラやイヌザクラも赤くなりつつあります。黄色はアカメガシワ、ケケンボナシ、カナクギノキ、アズキナシ、リュウキュウマメガキ、ウワミズザクラ、アカシデ、フジの小葉、ケヤキ、コナラ、ウリノキ等々多くの黄色の落ち葉を拾い上げては観察。くらがりでは珍しいアワブキ、ユクノキも落ち葉により新たに存在が確認できました。カエデの仲間ハナノキ（植栽）、オニイタヤ、ウリハダカエデ、ウリカエデ、イロハカエデ、チドリノキなどの紅葉はまだこれからです。クロチタケ、ニガクリタケ、スギエダタケ、ウロコタケ、ツチナメコ、クヌギタケ等々キノコは盛りを過ぎ数は少ないが、紅葉とともに秋を感じながらの観察は楽しく尽き

ることがありません。今年は参加者に何か一つスケッチをしてもらうことにしています。

今月は落ち葉のスケッチ……秋満喫の観察会となりました。



自然観察指導員と生物多様性条約 (その2)

尾張支部 曾我部行子

生物多様性を脅かす世界の経済

先号で、ボンの生物多様性条約 (CBD) 第9回締約国会議 (COP9) で議論されるのは、狭い意味での自然環境の保全だけではないとわかった、ということを書きました。

その後、生物多様性フォーラム (JFB) は、CBD 事務局長のジョグラフィ氏や、カウントダウン 2010 の事務局長ウインクラ氏との意見交換会を名古屋で開きました。まだまだ NGO の力が弱い日本での開催を危ぶむ私たちに、ジョグラフィ氏は「国連ルールでやる」と言い切りました。NGO の意見を取り入れる努力をしてきた生物多様性条約事務局としての発言でした。果たして、国連ルールは愛知県でも通用するのでしょうか。市民が行政と対等な関係を築いていない現状を、変えることはできるのでしょうか。

北海道洞爺湖サミットに合わせて開催された「市民サミット 2008 (オルタナティブ・サミット)」に参加することで、CBD がなぜ、世界の南北問題の解決に向けられているのかを知る絶好の機会となりました。資源に恵まれ、生物多様性も高いといえる途上国が、なぜこれほど貧困にあえいでいるのか。スーザン・ジョージの「なぜ世界の半分は飢えるのか」を読むことで、その理由がようやくわかりました。自由経済とグローバリゼーションです。

G8サミット NGO フォーラムへの評価は、「貧困・開発」「人権・平和」「環境」のユニットが一つにまとまったことでした。いつもはバラバラで行動している国際協力系と環境系が同じ船に乗ったこと

の価値とは、行政に対して NGO を認めさせるための一段を上がったことではないでしょうか。さて、CBD/COP10 で、それは果たせるのでしょうか…。

自然観察～自然保護～生物多様性

COP10 開催 2 年前、イベント生物多様性シンポジウム～知多地区における生物多様性保全～が、10 月 15 日東海市役所ホールで開催され、地域の活動事例として知多支部 (知多自然観察会) の発表がありました。年間活動報告では自主計画から協力まで含めると、なんと年間 150 回にも及ぶ観察会が行われていることが報告されたのです。その数の多さには敬服するしかありません。報告の最後で、「観察会の中で、自然保護について話すことができていない」という反省が添えられました。

自然観察、調査は生物好きには継続がたいへんなものの楽しい活動です。でも、活動が日常化していくと、いつのまにか何のためにやっているのかを忘れがちになります。知多支部 (知多自然観察会) の率直さは、そのことに気づかせてくれました。

生物多様性条約と国際会議の全貌を知することは難しいことです。しかし、地球上すべての生命を包む条約は、同時に人間生活すべてに関わります。あらゆる分野、セクターを柔軟な心でガラガラと混ぜなければなりません。私自身は、より多くの人々が生物多様性を糸口に、未来を手繰り寄せることができるような機会をつくれるよう、2010 年 CBD/COP10 に関わり続けます。

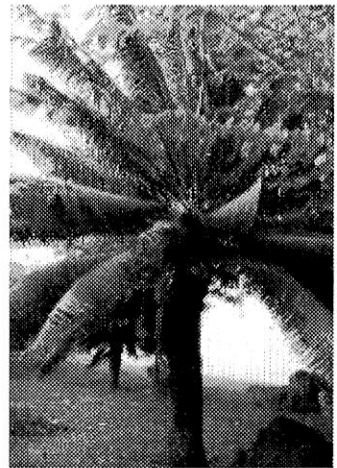
ニューカレドニアの自然を感じて（その1）

知多支部 吉川 洋行

2008年8月にニューカレドニア（以降NC）の「ジュラシックの森を訪ねて」ツアーに参加した。日本からは成田と関空からニューカレドニアエアーの直行便が出ていて便利。日本からの距離はおおよそ7,000km。乗ったら朝のNCに着く。NCの人口はグランテール島（四国ほどの面積）というフランスパン型の島を中心に20万人ほど。その約半分が首都のヌメアに住んでいるという。ヌメアの国際空港についてぱっと目に入ってきたのが、2〜3mに棒立ちになったソテツとドーム状になったパンダヌスだった。このソテツは山にも自生していたが、日本のソテツとは異なり、どの木もほとんど枝分かれしないでまっすぐに育っていた。パンダヌスについては後でもっと驚くことになった。ニューカレドニアの固有植物は、ランをはじめ3,200種以上。南部地域に見られる1,800種類の植物種の大半（約90%）は、ニューカレドニアのみに生息する固有種だそう。例えば裸子植物は43種（ENDEMIA. NC >> Faune et Flore de Nouvelle Calédonie より）発見されているが、その中には、世界で唯一の寄生針葉植物、*Parasitaxus ustus* や、世界にたった24種しか存在しない古代 Gondwanaland 時代の裸子植物から分派した植物種のうちの19種が含まれているそう。また、国鳥でもある飛べない鳥、カグーなど珍しい鳥類も多数棲息する貴重な動植物の宝庫ということだ。岩場の海岸植生の様子は沖縄に似ている。モンパノキやオオハマボウが生え、砂浜にはゴバンノアシがたくさん打ち上げられていた。

山の気候は通年、爽やかで暖かだそうだが、サラメアの高原では風呂場の水はこごえそうなくらい冷たかった。中心都市ヌメアから2〜3時間で全く違う景色に出会えることは不思議だった。グランドテール島を中心に、松林（実際はアロウカリア）で有名なイル・デ・パン島など美しい白砂のビーチに縁取られた島々が点在している。本島の中心を約1,000メートルのゴバンノアシ山脈が走り、東西の風景と気候を特色あるものにしていて、東側は豊かな雨量のため緑が多い一方、西は乾燥し、赤土がところどころ表面にのぞいているそう。全長1,600kmにわたるリーフ（堡礁）の輪によって囲まれたラグーン（礁湖）は、面積24,000km²で世界最大規模のサンゴ礁として世界遺産に登録された。

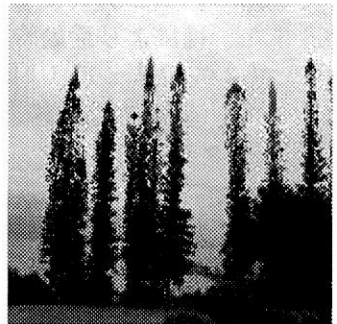
ニューカレドニアは良質のニッケルの産地としても有名で、その埋蔵量は世界第1位といわれている。鉄鉱石の産出量も相当なものようだ。固有種がとても多いが、森林の植物の様子はニュージーランドに近いようだ。観光で有名なところが多いが、ヌメアなど都市部を除けば山と牧畜地が目立っている。低地の乾いた草原にはニアウリというユーカリに似た香りで香料にする白いボトルブッシュフラワーがあり、火事に強いそう。 （次号に続く）



ソテツの仲間
Cycas seemannii A. Braun



パンダヌス（アダン？）



アロウカリアの森

～東三河の野生哺乳類・その1～

ロードキル個体からのメッセージ

奥三河・東三河支部 神戸 敦

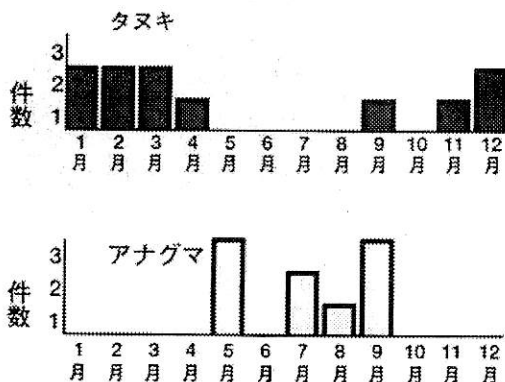
10年ほど前、転勤により豊橋市から新城市まで通勤することになりました。通勤路は弓張山地や吉祥山の裾野を走り、

1) 種別ロードキル件数

種	件数
ハクビシン	26
タヌキ	11
アナグマ	9
ノウサギ	4
キツネ	3
イタチ	3
テン	2
ニホンジカ	1
合計	59

四季折々の自然の変化を楽しめる素晴らしい道でした。ところが通勤をはじめてしばらくして野生哺乳類の交通ロードキル(事故による轢死)が多いいことに気づき、2001年5月から5年間記録をとってみました。

5年間のロードキル件数は59件で月平均約1件です。土日や休業日は観察しませんし、軽症で逃げた個体もありますから実際はさらに多いと思われます。種別ではハクビシンが圧倒的に多いです。しかも、2002年はロードキル件数全体の36%であったのに年を経るにしたがい増えて2005年には64%にまで増加しました。また、種により活動時期に特徴があることもわかりました(下図)。タヌキは暖かい時期は少なく、逆にアナグマは多く



見られました。また、疥癬症という病気にかかっているタヌキがいることも分かりました。センサーカメラでも数個体撮影しましたので、広範囲に蔓延していると思われます。予想外の動物のロードキルもありました。豊橋市石巻本町でのニホンジカ(下写真)です。ニホンジカは吉祥山に生息しているとの情報はありましたが、南下し石巻本町まで行動圏がひろがっているとは思いませんでした。現実にはその後、付近で複数個体を視認しました。



このようなロードキルは動物の行動圏とヒトの生活圏が重なっているために発生します。また、タヌキ・ハクビシンなどはヒトの生活に依存し生きている側面もあり、ロードキルを無くすことは困難だと思います。しかし、ロードキルは動物にとっても、ヒトにとっても悲しむべきことです。アンダーパスやアニマルブリッジを設置したりしている地方もあるようですが、経費等を考えると難しい話です。せめて、ロードキル頻発場所については警告看板が設置されればと思っています。また、個体数調節をどのようにすすめるかという課題もあると考えます。

平成 20 年度第 5 回理事会

日時：11 月 30 日 14:00～16:30

場所：新城市文化会館会議室

参加者 松尾、浅井、大谷、齋竹、高橋、
永田、山田、吉田、吉川、滝田、
榊原正躬、三田、梶野、小山、
榊原靖

◆最初に「生物多様性戦略」の策定にあたって
愛知県環境部自然環境課(川村・鈴木)
さんからのお話

要旨 愛知県では、生物の生息域の減少、
絶滅のおそれのある種の増加などの問題が
顕在化しており、多様な野生動植物が生
息・生育する環境を一体化して保全する「生
物多様性の保全」の必要性が高まっている。
そのため、平成 20 年 3 月に「生物多様性」
を基本理念とし、「生態系ネットワーク」「野
生生物の保護」を主要施策に位置づける自
然保護保全条例の改正を行った。これに基
づいて、国が策定した第三次生物多様性国
家戦略の取り組みや生物多様性基本法を踏
まえて、本県でも「生物多様性戦略」を策
定して、生物の多様性を維持するための施
策に取り組んでゆく必要がある。

ここで、「生物多様性戦略」の試案を説明
された。なお、この試案は、芹沢先生(愛知
教育大学教授)を座長とする諮問委員の間
で作成された。

問題点として

- (1) 収集した情報を発信し、ネットワークを
管理してゆくことを、どこが実施するのか。
 - (2) 陸上生物の多様性だけで、海の生物の多
様性を維持する戦略はどうするのか。
 - (3) 経済界や企業を巻き込んでゆくには、ど
うすればいいのか。
- などが指摘された。

「生物多様性戦略」の要旨については、総
会を通して、みなさんに伝えてゆきたい。

◆総会(3/20)にむけて

13:30 開始、15:00 講演会(講師：河窪先
生(岐阜大))、終了後茶話会、その後懇親会
を行う。

午前中は、理事会を行う。(総会の打ち合
わせなど)

なお、総会の場所については、12 月 20
日過ぎにならないと確定しない。

◆事業の取りまとめ

年間の観察会のまとめ(ふるさと自然観
察会)については、担当の山田まで

年間の研修会のまとめ(支部担当の研修
会)については、担当の大谷まで

◆来年度の研修会

宿泊込みで実施し、支部間の交流を兼ね
て実施できないか。

日程と題目を決め、講師には謝金も出す。

◆講習会

新入会員の会費の関係で、5～7 月の早
い時期に開催したい。

◆調査

来年度は予算が削られるので、調査をど
うするか。必要な調査はあるのか。調査は
見送るのか。結論はもちこし。

◆30 周年行事

冊子をつくる。内容を濃くして、売れる
物をつくる。(会長案)

◆支部総会の予定

1 月 12 日(月・祝) 尾張支部 東桜会館
(名古屋市)

2 月 7 日(土) 西三河支部

2 月 15 日(日) 知多支部・奥三河支部

2 月 22 日(日) 名古屋支部

2 月 22 または 23 日 東三河支部

◆次回 理事会

2 月 11 日(水・祝) 13:30～

なごやボランティア・NPO センター

(報告：事務局 浅井)

＝ 平成 21 年度総会 & 講演会のご案内 ＝

日時：3 月 20 日（春分の日・金）午後

場所：なごやボランティア・NPO センター（伏見ライフプラザ 12 階）

名古屋市中区栄一丁目 23 番 13 号 地下鉄[伏見]下車：南へ徒歩 6 分

☆詳細は次の「協議会ニュース」№.123 にてお知らせします。



左は生物多様性条約の COP10 支援実行委員会のシンボルマーク（横型）です。PR のため、実行委員会の承認を得て掲載しました。

編集部から

- No.116 から No.121 まで東三河支部の中西普佐子さんが表紙に植物のイラストを描かれ、知多支部の中井康夫さんがシリーズで「知多の海岸生物」について紹介してくださいました。ありがとうございました。
- 今回から、表紙は知多支部の山田絹子さんが担当され、連載は奥・東三河支部の神戸敦さんが野生哺乳類を中心に紹介される予定です。ご期待ください。
- 協議会ニュースは「支部だより」、「会員のページ」など、支部や会員のみなさんからの原稿を前提とした頁を設けています。積極的な投稿をお願いします。

編 集 後 記

- 明けましておめでとうございます。天候に恵まれたお正月になりました。今年は丑年、「ギューー」と、中身の濃い活動にしたいですね。
- 生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）の開催決定後、「生物多様性」についてメディアで紹介されることが多くなりました。その一方で「それって何？」という声も聞こえてきます。私たちが各地で行っている観察会は「生物多様性」を、わかりやすく、しかもやさしく伝えることができる「場」です。さて、みなさんはどのように伝えますか。
- COP10 にどのように係わるのか、私たち協議会も具体的な検討が必要です。奇しくも来年は、協議会の 30 周年とも重なります。みなさんの提案を下記編集部へ投稿ください。（近藤）

編集スタッフ

岡田 雅子 近藤 記巳子
齋竹 善行 酒井 勇治
永田 孝 山口 健

発送スタッフ

岩沙 雅代 横井 邦子

協議会ニュース編集部

〒482-0007

岩倉市大山寺元町 12-3

齋竹 善行

メ-ル：BZA03620.nifty.ne.jp

- 愛知県自然観察指導員連絡協議会 事務局（当面）

〒486-0904 春日井市宮町 3-6-2

松尾 初

Tel 0568-32-5069

- Web Page：<http://naichi.net/>

- 郵便振替口座：00820-9-6546（名義：愛知県自然観察指導員連絡協議会）